

日本軍政下のジャワにおける歌 ——グラフ雑誌『ジャワ・バル *Djawa Baroe*』を素材に——

丸山 彩*

織田 康孝**

はじめに

本研究の目的は、日本軍政下のジャワにおいて発信された歌の性格を明らかにし、当該期・当該地における歌の役割を検討することである。本稿では、グラフ雑誌『ジャワ・バル *Djawa Baroe*』（以下、『ジャワ・バル』と表記）に掲載された歌を見ていくことで、日本軍政下のジャワで普及した歌の特徴を紐解いていく。

日本軍政期のジャワにおける宣撫工作の手段は、映画・ラジオ・グラフ雑誌など視聴覚に訴えかけるものであった。中でも、映画を利用した宣撫工作については、倉沢の研究に詳しい。倉沢の研究によると、映画の上映には、飯田信夫らが作曲した曲がバックミュージックとして流されたという¹⁾。そして、倉沢は、『日本占領下のジャワ農村の変容』（草思社、1992年）の第6章「宣撫工作」において、宣撫工作に利用された「歌」を取り上げている²⁾。ここでは、1942年4月に市来竜夫作詞、飯田信夫作曲の《インドネシア万歳》（Hidoep Indonesia）というインドネシア語の歌が作られ、その1年後に設立された啓民文化指導所によって新しく作られた歌が、『ジャワ・バル』で紹介されたことが述べられている。しかし、『ジャワ・バル』に掲載された個々の歌を詳細に取り扱ってはいないため、各曲の情報を整理して、再検討

* 立命館大学文学部非常勤講師

** 立命館大学大学院文学研究科日本学術振興会特別研究員

する余地がある。

南方地域（現在の東南アジア）向けの音楽工作については、戸ノ下達也も映画がジャワ特有の宣撫工作として活用されたことについて言及している³⁾。さらに、戸ノ下は、大衆向けには内地の楽曲よりも、ガムランとクロンチョンの指導を重視したという、飯田信夫の音楽工作構想についても指摘している⁴⁾。南方諸地域の音楽工作については、長木誠司によるフィリピン⁵⁾、松岡昌和によるシンガポール⁶⁾、といった事例研究が蓄積されつつある。しかし、当時日本の植民地となっていた台湾や朝鮮における唱歌教育とは異なり、南方地域におけるその実際は、史料の制約上不明な部分が多い。

当時から、南方地域の諸住民は音楽、ことのほか歌を愛好する民族であるため、音楽による宣撫工作は有効であるとされてきた⁷⁾。本研究において、『ジャワ・バル』に掲載された歌を抽出し、それらの歌の特徴を整理することで、南方地域の日本軍による宣撫工作の一端が明らかとなる。その成果は、「大東亜共栄圏」構想下の音楽研究に寄与するものとなるはずである⁸⁾。

1. 本研究の対象

本稿で取り上げるグラフ雑誌『ジャワ・バル』⁹⁾には、1943年3月1日刊行の第5号から1945年7月15日刊行の第14号まで、50曲（同一曲の重複を含む）の歌が掲載されている。『ジャワ・バル』は、1943年1月、ジャワ新聞社¹⁰⁾によって創刊されたグラフ雑誌で、タイトルの *Djawa Baroe* は「新ジャワ」を意味する。同誌は、1943年1月1日より1945年8月1日まで、月2回（毎月1日・15日）、計63号刊行された。また、写真を多用し、幅広い層を対象としていたことがわかる¹¹⁾。本稿では、『ジャワ・バル』に掲載されたこれらの歌を整理することで、ジャワにおける歌を利用した宣撫工作の一端を明らかにしたい。

2. ジャワの初等教育における「唱歌」

1942年3月の第十六軍ジャワ島上陸後、翌月29日、現地固有の言語を使用する官立および私立学校が再開した¹²⁾。初等学校は内地にならって国民学校（初等国民学校、普通国民学校）と称された¹³⁾。1943年12月までに編纂された57種の教科書の中に、「唱歌」（科目名）の教科書はない。しかし、同年7月に制定された教授科目および時間数には、第1学年より第6学年までの学科目として「音楽」が設置されている。「音楽」の授業は、第1学年では、地方語（スダ語、ジャワ語、マヅラ語）によって3時間、第2・3学年では、地方語および馬來語（マレー語）によって2時間、第4学年以降は、馬來語によって2時間設置されている¹⁴⁾。ジャワの国民学校の学科目における授業使用言語を概観すると、低学年では地方語が用いられ、学年が上がるに馬來語が用いられていたことがわかる。「音楽」では第2学年より地方語と馬來語が用いられ、他の学科目に比べて早い段階で馬來語が使用されたと指摘することができる。「馬來語」自体は、第2学年より学科目が設置されており、第1～3学年では「地方語」の授業時間が多く取られていたのに対し、第4学年以降の「馬來語」の授業時間は「地方語」の倍近く取られている。なお、「日本語」の教授は第4学年より開始する。これらの教育内容及び使用言語から、学校教育においてはすべての児童が共通の言語（馬來語）で話せるようになることが目指され、「音楽」も例外なくそれに準じた言語で授業が実施されていたことがわかる。

日本軍政下のジャワにおいては、唱歌・音楽の教科書は編纂されていないため、具体的にどのような歌が教えられたのか、現地語の歌（ジャワの歌）が教えられていたのか、日本語の歌が移入されたのか、詳細は不明である¹⁵⁾。また、当該地の教師および視学の再教育にあたっては、「日本唱歌」と「音楽」が別科目として設定され、ともに「日本文化の真髄を認識せしめ、且つ大東亜共栄圏建設の大使命に覚醒せしめんとするもの」とされている¹⁶⁾。教

材については、後に述べる祝日大祭日儀式唱歌や『ウタノエホン 大東亜共栄唱歌集』所収の唱歌が日本語歌詞のまま教えられたことなどが考えられるものの、当時の教育内容の詳細を示す史料を欠くため、推測の域を出ない。

3. 啓民文化指導所における音楽工作

ジャワの軍政を担う軍政監部が設立されたのは、1942年8月である。軍政監部には、総務、財務、交通、産業、司法の各部が置かれ、同年10月には警務ならびに宣伝部、12月には内務部が増設された。総務および宣伝部長には軍人が、その他の部長には専門の文官が就いた。これらのうち、宣撫工作を主導したのは宣伝部である。そして、1943年4月には軍政監部によって、芸能文化の面から民衆の啓蒙自覚を促す中央指導機関として、また、宣伝部(後に宣伝班)の下位組織として、啓民文化指導所が設立された¹⁷⁾。

啓民文化指導所の事業方針には、「健全なる伝統芸能の保護育成と指導」「敵性或は不健全芸能の排除」「日本の国情と文化の普及紹介」「民衆娯楽の供与とこれを媒体とする啓蒙宣伝」「芸能文化団体の統制と芸能文化人の育成」「大東亜圏各文化団体との連絡協力」が挙げられた¹⁸⁾。啓民文化指導所には、本部、事業部、文学部、音楽部、美術部、演劇部の6部が置かれ、現地の住民を職員とし、軍政監部から派遣された日本人の指導員とともに、運営にあたった¹⁹⁾。『ジャワ年鑑』には、音楽部の1944年までの事業内容が紹介されているため、以下に示す。

敵性音楽の排除、音楽団体の統制指導、ガメラン及び民謡の保存普及、混声合唱団の結成、日本歌曲の紹介、新曲の発表、慰安宣撫工作等。

部長ウトヨ、指導委員長飯田信夫を中心に結成され、のち青木囀託、原住民作曲家シマンジュンタ・クスビニ等を部員に迎えた。ジャズ化せんとし、あつたこの地の音楽傾向の是正は着々効果をあげ、伝統音楽は

保存普及に勤めてゐる。混声合唱団は男女各十名より成る。現在までに発表した新歌曲のうち主なるものは「米英撃滅の歌」「防衛義勇軍の歌」「勤労の歌」等でこれらは島外にまで普及、その効果は見るべきものがある。なほ現在企画中のものとしては音楽講習会の開催、作曲並びに演奏の競演会、ジャカルタ放送管弦楽団との提携による管弦楽の定期演奏会等がある。（『ジャワ年鑑（昭和十九年）』ジャワ新聞社、1944年、168頁）

以上から、啓民文化指導所では、飯田信夫の指導の下、歌曲の制作や日本の歌曲の紹介のみならず、ガムランなどのジャワの伝統芸能を保護することで、アメリカやオランダの影響を受けた音楽からの解放を目指すこととした²⁰。音楽部で新たに作られた歌曲には、文学部によって歌詞が提供された。後述するように、これらの歌が『ジャワ・バル』紙上で紹介されたのである。

4. 『ジャワ・バル』に掲載された歌

『ジャワ・バル』には多くの歌が五線譜を掲載する形で紹介された。五線譜には、数字を伴うものも見られ、これらは五線譜が読めない読者へ対応したものだと思われる。倉沢愛子によれば、これらの歌の宣伝テーマは、「労働意欲を高揚させるもの」「闘争精神を高揚させるもの」「大東亜共栄圏の一員としての愛国心意識を高揚させるもの」「その他」に分けられるという²¹。啓民文化指導所によって制作されたこれらの歌のほかにも、『ジャワ・バル』には多くの歌が掲載されている²²。『ジャワ・バル』に掲載された最初の歌は古関裕而作曲の《大南方軍の歌》で、1943年3月1日刊の第5号に、日本語歌詞で5番まで掲載されている。譜面には、「大南方軍の歌は、新ジャワ建設日にガンビル広場にて聴かれ、発表されるであろう軍歌である。」²³とのキャプションが付けられていた。以下、時期を追って掲載された歌を見

ていく。

(1) 日本の歌の移植

《大南方軍の歌》に続いて掲載されたのが、1943年9月に内地にて刊行される『ウタノエホン 大東亜共栄唱歌集』（以下、『大東亜共栄唱歌集』）に収録された唱歌で、『ジャワ・バル』には「ダイトーア キョーエイケン コドモ ノ ウタ」として紹介されている（以下、本稿では「大東亜共栄唱歌」と表記）である。『ジャワ・バル』第13号には、本号より順にこれらの唱歌を紹介していくことが述べられている²⁴⁾。表①に示したように、大東亜共栄唱歌は唱歌集の収録順に全10曲が掲載されている。

表① 『ジャワ・バル』に掲載された「大東亜共栄唱歌」

曲名	作詞	作曲	掲載号
ヒノマル	三好達治	橋本國彦	13 (1943.7.1)
フネ	西条八十	下総皖一	14 (1943.7.15)
ボクラ ノ ヘータイサン	田中稔	平尾貴四男	14 (1943.7.15)
ダイトーア カゾエウタ	古山省三	平岡均之	15 (1943.8.1)
コモリウタ	長倉直	弘田龍太郎	15 (1943.8.1)
アイウエオ ノ ウタ	砂川守一	堀内敬三	16 (1943.8.15)
オコメ	百田宗治	中山晋平	16 (1943.8.15)
ニッポン ノ コドモ	与田準一	草川信	17 (1943.9.1)
アジア ノ コドモ ウンドーカイ	池田嘉登	箕作秋吉	17 (1943.9.1)
ニッポン ノ アシオト	日本少国民文化協会		18 (1943.9.15)

*曲名の表記は『ジャワ・バル』による。『ジャワ・バル』では作詞、作曲者名もカタカナで表記されていたものの、誤植があったため、本表ではすべて漢字表記に改めている。

『大東亜共栄唱歌集』は、1943年9月に朝日新聞社によって刊行された。唱歌集およびレコードの発売以前には、朝日新聞社7階の講堂において、レコード視聴を兼ねた舞踊発表会が開催された²⁵⁾。このことから、朝日新聞社が主導して大東亜共栄唱歌の普及を図ったとわかる。『大東亜共栄唱歌集』

は、南方諸地域の児童のために、歌と絵本という目と耳から大東亜共栄圏の理想を注入し、彼等が愛する音楽を通じて日本語の普及も図るため、社団法人日本音楽文化協会、同日本少国民文化協会、朝日新聞社によって編纂された唱歌集である²⁶⁾。後援には、陸・海軍省、文部省、情報局、社団法人日本放送文化協会、協賛には国際文化振興会、日本宣伝文化協会、日本出版文化協会、日本蓄音器レコード文化協会が名を連ねている。「南方諸住民達の心の隅々から米、英依存の残滓を払拭し、日本の指導下に同甘共苦、彼等をして積極的に対米英戦争に協力せしめんとする」²⁷⁾という目的は、啓民文化指導所音楽部の方針に通ずるものがある。収録する唱歌の歌詞の半数は、懸賞によって募集のうえ選考した。なお、同唱歌集については、酒井健太郎の研究に詳しい²⁸⁾。日本の子どもたちのみならず、南方諸地域への普及を目指した同唱歌集所収の10曲については、南方版が発見されていないため、実際に普及したかどうかは、今まで明らかでなかった²⁹⁾。シンガポールにおいては、カタカナ新聞『サクラ』に大東亜共栄唱歌2曲が掲載されたことが確認されている³⁰⁾。しかし、『ジャワ・バル』には、大東亜共栄唱歌が唱歌集の刊行以前に掲載されていた。『ジャワ・バル』を発行するジャワ新聞社は、『大東亜共栄唱歌集』の発行元である朝日新聞社が設立した新聞社であるため、『ジャワ・バル』は大東亜共栄唱歌を掲載する、最も適当な媒体であったと指摘できよう。つまり、朝日新聞社が進出したジャワは、大東亜共栄唱歌を普及させる最適の地であった。

『ジャワ・バル』には、大東亜共栄唱歌のほかにも、当時の日本国内で歌われていた歌が掲載されている。まず、ラジオ番組「国民歌謡」で放送され、のちに大政翼賛会によって選曲された「国民の歌」が3曲掲載されていた。《トナリグミノウタ》（隣組の歌）は、1944年3月1日刊行の第5号（33頁）に数字を伴った五線譜で、日本語歌詞4番まで掲載され、同年4月15日刊行の第8号（34頁）には、伴奏譜を伴った形で、現地語の訳詞が付されていた。現地語の歌詞を掲載した第8号では、作曲は飯田信夫、作詞は啓民文化

指導所文学部とされているものの、同曲の作詞者は岡本一平であるため、啓民文化所によって訳詞が作成されたものとみられる。飯田は、現地の子どもたちが「トントントンカラリ」と歌いながら遊んでいる光景が見られた感激を語っている³¹⁾。《ヤシノミ》(椰子の実)は、同年4月1日刊行の第7号に、日本語の1・3番の歌詞が掲載されている。同曲には、

おそらく、読者の中にはすでにこの歌を知っている方が多いであろう。日本では非常に好まれて歌われている。歌詞の内容は、遠く離れた南の地域から流されてきた一つの椰子の実を見たときに動かされたある旅人の感情を歌ったものである。しかし、もし、終始悲しく歌うとかえって、この歌の品位を下げてしまう。もし、丁寧な気持ち、音符に忠実に従いさえして、そして質素な気持ちをもてば、この歌を歌うのに規定された障害はないのである。(『ジャワ・バル』第7号、1944年4月1日、34頁、織田による和訳)

と飯田信夫による解説が付されている。ジャワに馴染みのある椰子の実を題材にしているため、数多ある「国民歌謡」の中から同曲が選曲されたのであろう。そして、《フジンジュウゲンカ》(婦人従軍歌)は、同年11月1日刊行の第21号(34頁)に、伴奏譜を伴い、日本語歌詞で掲載されている。

また、1944年1月1日刊行の第1号(34頁)には、《イチガツツイタチ》(一月一日)、同年2月1日刊行の第3号(34頁)には、《キゲンセツ》(紀元節)が掲載されている。これらは、祝日大祭日儀式唱歌³²⁾である。『ジャワ・バル』第1号では、日本では四方拝(1月1日)、紀元節(2月11日)、天長節(4月29日)、明治節(11月3日)が最も重要な祝日であり、四方拝の儀式で国民学校の子どもたちによって歌われるのがこの《イチガツツイタチ》であると説明されており、歌詞の意味も解説されている³³⁾。日本の祝日には、ジャワにおいても儀式を執行し、唱歌を歌わせることを意図したのである

う。《キゲンセツ》は、

必ず a hoe goe [アフグ——訳者注] を a o goe [アオグ——訳者注] として読まなければならない。ここでの goe は、必ず ngoe と言わなければならない。文中の “me goe ni”, “hi tsoe gi,” “oe go ki”, “ka ga ya ki”, “ta goe i” は、g を ng として読まなければならない。(『ジャワ・バル』第3号、1944年2月1日、34頁、織田による和訳)

と日本語の発音や鼻濁音の歌唱法について説明がされている。これらの儀式唱歌に加えて、日本語歌詞の《ゲンカン》(軍艦)も同年1月15日刊行の第2号に掲載されている。

(2) 啓民文化指導所による歌の制作

1943年4月に設立された啓民文化指導所では、歌の制作が行われた。その全貌は明らかではないものの、本稿では『ジャワ・バル』に掲載された啓民文化指導所が制作した歌を取り上げる。啓民文化指導所においては、同年9月までに、一般現地住民から作詞作曲を募集し、「米英撃滅行進曲」「アジアの力」「進めインドネシア」「新女性の希望」「新女性」「民族の希望青年」等の優秀作品20余曲が選定された³⁴⁾。『音楽文化新聞』第59号においては、ジャワで作られた国歌、大衆歌は「交通従業員の歌」「産業従業員の歌」「プートラ会歌」「青少年団歌」「共同防衛歌」「婦人団歌」「体育の歌」「防空歌」「造船の歌」「勤労奉仕団〔の歌〕」「海事奉公団歌」などにわかれている³⁵⁾とあるため、掲載された歌の特徴を表②に示した。

啓民文化指導所が制作した歌がはじめて掲載されたのは、1943年10月1日刊行の第19号、《ASIA BERPADOE》(アジアは一つ)である。同曲は、現地語の歌詞が付されているため、現地の住民に歌わせることを目的に制作されたものである。続く「啓民文化唱歌」4曲は、綿花栽培畑で働く労働者た

表② 「ジャワ・バル」に掲載された啓民文化指導所が制作した歌

	曲名*1	特徴*2	作詞	作曲	掲載号
1	ASIA BERPADOE / アジアは一つ	共同防衛歌	啓民文化指導所文学部	啓民文化指導所音楽部	19 (1943.10.1)
2	KE PABERIK / 工場へ	産業従業員の歌 (啓民文化唱歌4部作)	ウスマイル・イスマイル	シマン・ジュンタ	21 (1943.11.1)
3	DI-PABERIK / 工場で		ウスマイル・イスマイル	シマン・ジュンタ	22 (1943.11.15)
4	DI-KEBOEN KAPAS / 綿花畑で		啓民文化指導所文学部	啓民文化指導所音楽部	23 (1943.12.1)
5	POELANG / 帰らふよ		啓民文化指導所文学部	啓民文化指導所音楽部	24 (1943.12.15)
6	BEKERDJA / 【働こう】	共同防衛歌、産業従業員の歌	INOE KERTOPAVI	飯田信夫	1 (1944.1.1)
7	TENTARA PEMBELA / 【防衛軍】	共同防衛歌	啓民文化指導所文学部	シマン・ジュンタ	2 (1944.1.15)
8	TANAH TOEMPAH DARAHKOE / 【わが祖国】	【愛国心】	サスシ・パネ	シマン・ジュンタ	3 (1944.2.1)
9	SELALOE SEDIA 【いつも準備ができています】	共同防衛歌	啓民文化指導所文学部	クスビニ	4 (1944.2.15)
10	MADJOE POETERA-POETERI INDONESIA 【インドネシアの若者よ進め】	青少年団歌	SOETOMO DJAUHAR AFRIN	シマン・ジュンタ	6 (1944.3.15)
11	TIDOER NAK / 【子どもよ眠れ】	婦人団歌	啓民文化指導所文学部	飯田信夫	8 (1944.4.15)
12	KAMPOENG HALAMAN / 【故郷】	共同防衛歌	St. EIMAR	飯田信夫	9 (1944.5.1)
13	TENTARA PEMBELA BERSIAP...!! SERANG!! / 【防衛軍、準備せよ!!進め!!】	共同防衛歌	啓民文化指導所文学部	クスビニ	10 (1944.5.15)
14	AJOENKAN PALOE BIKIN KAPAL 【船を揺らして船を造る】	造船の歌、共同防衛歌	ウスマイル・イスマイル	シマン・ジュンタ	11 (1944.6.1)
15	KE-LAOET / 【海へ】	青少年団歌	ウスマイル・イスマイル	シマン・ジュンタ	13 (1944.7.1)
16	DJAWA SENTOTAI / 【ジャワ戦闘隊】	共同防衛歌、勤労奉仕団	(啓民文化指導所)	飯田信夫	14 (1944.7.15)
17	DJAWA HOOKOO KAI 【ジャワ奉公会】	ブートラ会歌	(啓民文化指導所)	飯田信夫	15 (1944.8.1)
18	MEMBELA PABRIK / 守れ工場	共同防衛歌	TAKAHASI HIROAKI	啓民文化指導所音楽部	22 (1944.11.15)

* 1:「 」で示した日本語曲名は織田による和訳。

* 2:『音楽文化新聞』第59号(1943年9月10日)記事から項目として採用した。

ちを指導するために制作した4部作の唱歌である³⁶⁾。これら4曲には、日本語歌詞も付されている。しかし、目的は綿花を栽培する労働者の指導であるため、日本人が歌うことを意図したのではなく、日本人に紹介するために和訳されたのであろう。その後、『ジャワ・バル』に掲載される歌は、現地語の歌詞のみであり、日本語には訳されていない。前述したように、1943年4月から9月の間に、既に20曲以上の歌が作られたというものの、『ジャワ・バル』に掲載された歌を概観すると、前年に作られていた歌と一致するとは言い難い。

それでは、1944年頃に啓民文化指導所で制作された歌には、どのような特色があるのであろうか、いくつかの歌詞を見ていきたい。なお、以下の歌詞①②④および歌詞④の解説はすべて織田による和訳である。

歌詞① 《ASIA BERPA DOE》(アジアは一つ)

(『ジャワ・バル』第19号、1943年10月1日、34頁)

作詞：Usmar Ismail (啓民文化指導所文学部)

作曲：Siman dioentak (同音楽部)

1. 鋼鉄のような強固な意志の鎖が一つに結ぶ
嵐の中心の大アジアの強固な砦は一つに団結する
アジアよ団結せよ、共に死に、共に生きることを誓う
2. 嵐が鋼鉄を吹き飛ばそうとも
危険が鎖を断ち切ろうとも
アジアの砦は嵐に対抗する
アジアよ団結せよ、共に死に、共に生きることを誓う

歌詞② 《MADJOE POETERA-POOETERI INDONESIA》

[インドネシアの若者よ進め]

(『ジャワ・バル』第6号、1944年3月15日、34頁)

作詞：SOETOMO DJAUMAR ARIFIN

作曲：C. SIMANDJOENTAK

1. インドネシアの青年男女よ

何世紀もの間苦しんだ

さあ一斉に夢から目覚めよう

さあ祖国に奉仕しよう

* 旗をあげろ

力を動かせ

大アジアを創造せよ

旗をあげろ

力を動かせ

大アジアを創造せよ

2. さあ、我々の青年男女よ進め

さあインドネシアの子どもよ早く進歩せよ

怒りと災いを蹴散らそう

さあ、喜びを広げよう

* 繰り返し

歌詞③ 《MEMBELA PAB'RIK》(守れ工場)

(『ジャワ・バル』第22号、1944年11月15日、34頁)

作詞：TAKAHASHI HIROAKI

作曲：啓民文化指導所

1. 守れ工場 われらの戦場

みんなガッチリ手を組んで

- 力のかぎり働かん
 勝利の秋のその日まで
- * 来たれ米英打ちてぞ止まん
 守りし堅し 鉄壁ぞ
2. 守れ工場 われらの戦場
 機械はわれらの武器なるぞ
 いざに備へて常日頃
 鍛えしこの腕この力
- * 繰り返し
3. 守れ工場 われらの戦場
 われらは銃後の戦士なり
 華と散りにし英霊の
 御跡に続く覚悟あり
- * 繰り返し

歌詞④ 《TANAH TOEMPAH DARAHKOE》 [わが祖国]

(『ジャワ・バル』第3号、1944年2月1日、34頁)

作詞：S. PANE 作曲：SIMANDJOENTAK

1. 崇高で神聖な 僕が生まれた国
 いつも緑で金色に輝く国
 僕の祖国は大アジアの一員
 畏敬を受け取り、僕の愛を君へ

KIIMIN BUNKA SHIDOJO

MEMBELA PAB'RIK

Tempo Ad libitum
LAKSANA: SERY-SUTARA, SJARI TAKASAKI MUDANI

Membè-la
pab'rik mè-dan ki-ta. Bersatœ pa-dœ orang semœe.
a. Ki-ta ker-dja se-koat te-na-ga. Soe-pa-ja
pas-li ber-perang dja-ja. A-jo bersa-toe, se-
rang seterœe tahanan dja-ja lak-sa-na ba-dja.

MEMBELA PABRIK

- I. Membela pabrik médan kita. Bersatœ padœ orang semœea Kita kerdja sekoat tenaga, Soepaja pasti berperang djaja. Ajo bersatœ serang seterœe tahanan djaja laksana badja.
- II. Membela pabrik, medan kita Pelbagai mesin terlindoong tepat Sebagai bahan bagi rata Latihan kita rapi tjepat.
- III. Membela pabrik medan kita Pahlawan djati kita semœea Hidoep dan mati sama-sama Kita sehati, s'rasa, sedjiwa.

REFR:

Ajo bersatœ
Serang seterœe
Tahanan djaja
Laksana badja

REFR:

Ajo bersatœ
Serang seterœe
Tahanan djaja
Laksana badja.

Bedak "WANITA"

Peroesahaan "KAWI" Malang

守れ工場
 守れ工場は、我々の健康と安全を守るための第一歩です。守れ工場は、我々の健康と安全を守るための第一歩です。守れ工場は、我々の健康と安全を守るための第一歩です。

ジャワバルー (第二十二号) 昭和十九年十一月十五日発行 (第二十二号、毎月一日、十五日発行) 発行所 爪哇新聞社 創刊 一九二一年 (ジャババ新聞の前身) 印刷所 ジャワ新聞社 ジャカルタ印刷局代印	Djawa Baroe (22) Terbit pada 15 November 1944. (Terbit 2 X sebulan, tiap tgl. 1 dan 15) Pemimpin penerbit S. Higashiguchi Harga satu f 0.20 (Dibayar lebih dahulu) Penerbit DJAWA SHIMBUN SHA Yamato Bashi kita Dori 8, Dkt.
---	---

譜例① 《MEMBELA PAB'RIK》(守れ工場)
 (『ジャワ・バル』第22号、1944年11月15日、34頁より転載)

„TANAH TOEMPAH DARAHKOE“

MAESTOSO
SolemnE

SIAI: 5 PANE
LAGU: SIMANDJENTAK
KEIMIN BUNKA SHIBESHO

The musical score consists of a vocal line and piano accompaniment. The piano part features a steady accompaniment of chords in the right hand and a rhythmic bass line in the left hand. The vocal line includes lyrics in Indonesian with diacritics. Fingerings and breath marks are indicated throughout the score.

Ta - nah toem-pah da - rah-koe jang saa-tji moe-li - a

Na - gri si - nak mao la - gi - poen hi - djau se - la - los

Ta - nah a - ir - koe ang - go - ta A - si - a Ra - ja

Te - ri - ma - lah hor - mal ka - sth - koe ke - pa - da - mao

譜例② 《TANAH TOEMPAH DARAHKOE》
 (『ジャワ・バル』第3号、1944年2月1日、34頁より転載)

3. 清らかで青い、川、山、空

僕の愛する森、湖

祖国は平等に魂によって尊ばれる

我が故郷よ 永遠に万歳

(2・4 番は省略)

飯田信夫による解説

この歌は、本来なら賑やかなものであるが、実際は、宗教に基づいて、厳肅な気持ちで歌うべきである。この歌はそれ程困難ではないので、歌詞の言葉の意味をよく理解して歌っていただきたい。恰好をつけて歌うのではなく、むしろ、愛を注ぎ、かつ祖国への深い愛情を持って、整然と畏敬の念を持ち歌っていただきたい。

各曲の特徴は、表②に示したものの、歌詞を細かく見ていくと、簡単に分類できるものではないこともわかる。宣伝部は1942年から1945年にかけて、毎年プロパガンダのテーマを設定していた³⁷⁾。1942年のテーマは、「大東亜戦争の目的」「大東亜共栄圏の構想」「『アジアは一つ』」「3A運動」であり、翌年に『ジャワ・バル』に掲載された歌は、曲名にまさに「アジアは一つ」を掲げていた(歌詞①)。1943年のテーマは「大東亜共栄圏構想」「食糧増産推進」「粃の供出」「労務者募集(後半期より)」「住民の力と友情を結集する」「戦力強化」「ジャワ防衛」であり、「大東亜共栄圏構想」は、《MADJOE POETERA-POETERI INDONESIA》(歌詞②)の中で、「大アジアを創造せよ」と歌い込まれている。また、表②に示した特徴の「共同防衛歌」は、「ジャワ防衛」を歌ったものである。《MEMBELA PAB'RIK》(歌詞③)では、タイトルに「工場」を掲げながらも、戦力を強化して米英からジャワを守るといった内容である。このように、プロパガンダのテーマが啓民文化指導所によって新作される歌に読み込まれており、歌を制作するのに時間を要するた

めか、『ジャワ・バル』に掲載されるまでには若干の時差がある。また、これらの歌詞は啓民文化指導所の文学部より提供されたものである。現地の文学者等によって作成されたため、現地語の歌詞が提供されているものの、『MEMBELA PAB'RIK』のみ歌詞の日本語訳が掲載されていた。これは、作詞者が日本人であるため、まず日本語で歌詞が作成され、現地で歌うために啓民文化指導所によって、現地語の歌詞に訳されたのであろう。『ジャワ・バル』に掲載された譜面（譜例①）を見ると、他の歌と同様に、啓民文化指導所によって制作された歌であることがわかる。行進曲風の同曲には、作曲者も明記されていない。

啓民文化指導所が制作した歌詞は、「大東亜共栄圏」構想や米英からの防衛を歌ったものが多いなか、一見プロパガンダとは性格の異なる印象を受ける歌も見られる。《TANAH TOEMPAH DARAHKOE》（歌詞④）では、もちろん歌詞には「僕の祖国は大アジアの一員」であると、「大東亜共栄圏」を歌ってはいるものの、解説にもあるように、祖国への愛を歌った歌である。曲調は勇ましさを感じさせるものではなく、穏やかな愛国歌といった印象を受ける。戦時色、宣伝色がそれほど強くない愛国歌が作られたのは、日本軍は決してジャワを占領しようとしているのではなく、オランダから解放したのだという意識を植え付ける目的もあった。オランダを一掃して、自分たちの素晴らしい国を愛しましょうと歌詞に歌い込んだ。そして、自分たちの国はオランダから解放してくれた日本が建設した、「大東亜共栄圏」の一員だと信じ込ませた。啓民文化指導所が制作したこれらの歌は、「大東亜共栄圏」構想下で、ジャワにおける人民教化に利用されたものである。

(3) 軍政監部制定の唱歌

1944年2月15日刊行の『ジャワ・バル』第4号に掲載されている2曲の「国民学校の歌」は、軍政監部が制定した唱歌である。「国民学校の歌」は、ジャワの国民学校で歌われる歌として、歌詞の懸賞を実施して制作されたも

NJANJIAN SEKOLAH RAKJAT

編入: 昭和11.11.6 國民学校の歌(東亜のよい子供)

國民学校の歌(東亜のよい子供)

譜例③ 《海路はるかに》

譜例④ 《東亜のよい子ども》

(『ジャワ・バル』第4号、1944年2月1日、33頁より転載)

AKAN DINJANJI-KAN DISELOEROEH DIAWA

Kini soedah selesai njanjian kanak-kanak. Gocsekkanboe telah mengadakan sajembara tentang sja ir oentoeok dipakai sebagai njanjian bagi Sekolah Rakjat diseleroeh Djawa.

Djoemlah jang toeroet sajembara adalah 832, baik dari pihak Nippon, masoeppen dari pihak Indonesia. Dan setelah diadakan pemilihan jang teliti sekali laoe jang terpilih ialah „Kanak-kanak baik dari Asia Timoeer” (Satjio Okada) (kanan), „Djaeoch per-djalanan disamoedera” (Kakoe Katsoejama) (kiri).

編入: 昭和11.11.6 國民学校の歌(東亜のよい子供)

國民学校の歌(東亜のよい子供)

のである³⁸⁾。応募数は日本、インドネシア合わせて832であった。《東亜のよい子ども》は「さちよ おかだ」、《海路はるかに》は「かく かつやま」の歌詞が選ばれた。両者ともに日本人なのであろう、歌詞は日本語のみ掲載されている。《東亜のよい子ども》は同年3月15日刊行の第6号（18～19頁、32頁）に、《海路はるかに》は同年4月1日刊行の第7号（20～21頁、31頁）に、五線譜とともに踊り方も紹介されている。「国民学校の歌」は、「ジャワ全島の国民学校で歌はれる校歌」とされ、踊りの振付は女子教員錬成所の教員たちによってつくられたものだという³⁹⁾。

啓民文化指導所が制作した歌は、青年や労働者といった一般大衆への宣撫色が強いものであったのに対し、軍政監部が制定した唱歌は、歌と踊りをもって子どもたちへ共同体意識を植え付けるものであった。

(4) 1945年に掲載された歌

1945年に入ると、前年に比べて歌の掲載頻度が落ち込む（表③）。加えて、『ジャワ・バル』誌上には、明らかに啓民文化指導所が作成したとわかる歌がなくなるのである。

表③ 1945年に『ジャワ・バル』に掲載された歌

	曲名	作詞	作曲	掲載号
1	勝関ノ歌	岡報道部		2 (1945.1.15)
2	MARES SEINENDAN [青年団行進曲]	ウスマイル・ イスマイル	シマン・ジユンタ	3 (1945.2.1)
3	コウア ホウコウノ ウタ	野口米次郎	信時潔	5 (1945.3.1)
4	サンギョウ ホウコクカ	北原白秋	高階哲夫*	6 (1945.3.15)
5	MENABOENG [貯蓄]	不明	不明	7 (1945.4.1)
6	Hidoep Baroe [新生活]	R. harta		8 (1945.4.15)
7	Memoedji Amat Heiho [兵補を称賛しよう]	S. M. Moechtar		12 (1945.6.15)
8	KIRIKOMI NO UTA [斬り込みの歌]	日夏栄太郎	クスビニ	14 (1945.7.15)

*「タカナシ テツヲ」と誤表記されていた。

《勝関ノ歌》(1)、《コウア ホウコウノ ウタ》(4)、《KIRIKOMI NO UTA》(8)は、米英蘭からの独立および「大東亜共栄圏」について歌ったもの、《サンギョウ ホウコクカ》(4)、《MENABOENG》(5)、《Memoedji Amat Heiho》(7)は戦時下を歌ったものであるのに対し、《Hidoep Baroe》(6)は独立後について歌われ、他の歌とは異なる内容である。《MARES SEINENDAN》(2)は、作詞者・作曲者がウスマイル・イスマイル、シマン・ジユンタであることから、啓民文化指導所が制作した歌だと考えて間違いはない。同曲は、表②の「青少年団歌」に相当する。また、1944年の宣伝部が掲げたプロパガンダのテーマには、「節約と貯蓄」があり、《MENABOENG》(5)はまさに「貯蓄」が曲名である。同曲は作詞・作曲者ともに明記されていなかったものの、プロパガンダのテーマが読み込まれているところを見ると、啓民文化指導所が1943年より続く一連の流れの中で制作した可能性が大いにある。《KIRIKOMI NO UTA》(8)についても、作曲者は啓民文化指導所音楽部に所属したクスビニである。作詞の日夏栄太郎は、宣伝部に所属し、映画制作や演劇指導に従事した人物である⁴⁰⁾。日夏による歌詞は前年までは見られないものの、同曲も啓民文化指導所が制作したのではないだろうか。同曲の歌詞は現地語であり、日本語歌詞は掲載されていない。

1945年に入ると、《コウア ホウコウノ ウタ》や《サンギョウ ホウコクカ》といった日本の歌を続けて掲載されたり、《Hidoep Baroe》と《Memoedji Amat Hiho》が数字譜で掲載されていたり、また、他の歌の譜面を見ても、前年に掲載されていた「啓民文化指導所」の譜面とは明らかに形態が異なる。この時期になると、啓民文化指導所での歌曲制作が低迷したものと見られる。

むすび

本稿では、グラフ雑誌『ジャワ・バル』に掲載された歌を素材として、1943

年から1945年までのジャワへ普及が図られた歌について見てきた。『ジャワ・バル』に掲載された歌からは、以下のような流れが見えてくる。まず、大東亜共栄唱歌という日本で作られた唱歌の移植、続いて、祝日大祭日唱歌やその他の日本の歌の移入、そして、日本人指導の下、啓民文化指導所によって現地語の歌が制作された。啓民文化指導所の歌の制作は、1944年にピークを迎え、その後『ジャワ・バル』へ歌の掲載が減ったことから、低迷したと考えられる。

また、本稿においては、以下の点を指摘した。第一に、朝日新聞社が進出したジャワという地域は、大東亜共栄唱歌が普及すべき格好の地であった。第二に、「大東亜共栄圏」の名の下に、人民教化を目的として歌が利用された。その際、宣伝部のプロパガンダの年次目標が、啓民文化指導所によって歌に読み込まれた。

日本においても、明治期以来、学校教育において、歌は国家教育の道具として利用されてきた。『ジャワ・バル』に掲載された歌の大半は、主に読者層である成人を対象にしていることから、学校教育の教材になったとは考えにくい。しかし、大東亜共栄唱歌や国民学校の歌については、教科書が編纂されなかった当時のジャワの初等教育において用いられた可能性が大いに考えられる。

今後の展望

本稿では『ジャワ・バル』という一雑誌のみを取り上げたため、いまだ当該期のジャワの歌の全体像を明らかにできていない。ジャワ新聞社は、現地語新聞『アジア・ラヤ *Asia Raya*』も刊行しており、同新聞においても歌を掲載している。今後は、そのような他のメディアで取り上げられた歌も収集し、比較、検討を行っていく。また、啓民文化指導所が制作した歌も、『ジャワ年鑑』や『音楽文化新聞』の記事を見る限りでは、『ジャワ・バル』に掲

載されたものがすべてではないことが明らかである。啓民文化指導所が制作した歌の全貌を明らかにするためには、さらなる調査が必要である。『ジャワ・バル』には、日本の歌、現地語の歌が多数掲載されていた。しかし、雑誌に掲載されていただけでは、それらの歌がどの程度普及したのか、定かではない。歌の普及状況を解明するためには、現地での聞き取り調査なども実施する必要がある。以上の点を課題とし、本研究を発展させていきたい。

凡例

史料中で用いられている旧字体は、適宜新字体に改めた。

注

- 1) 倉沢愛子「日本軍政下のジャワにおける映画工作」『東南アジア—歴史と文化—』山川出版社、1989年。
- 2) 倉沢愛子『日本占領下のジャワ農村の変容』草思社、1992年、292～294頁。
- 3) 戸ノ下達也『音楽を動員せよ』青弓社、2008年、184頁。
- 4) 同上、195～196頁。
- 5) 長木誠司「南方占領地域での日本による音楽普及工作」戸ノ下達也・長木誠司編『総力戦と音楽文化 音と声の戦争』青弓社、2008年、第3章。
- 6) 松岡昌和「日本軍政下シンガポールにおけるこども向け音楽工作」『アジア教育史研究』第18号、2009年、同「日本軍政下シンガポールにおける歌の教育と『日本イメージ』」『一橋日本語教育研究報告』3、2009年。
- 7) 上田友亀「大東亜共栄唱歌をつくれ」『音楽文化新聞』第4号、1942年2月1日、4面。
- 8) 戸ノ下達也らによって、社団法人日本音楽文化協会監修『音楽文化新聞』（1941年12月20日～1943年9月20日、全60号）、『日本音楽文化協会会報』（1944年3月15日～1945年1月1日、全11号）が復刻されたことで、以前よりもアジア・太平洋戦争期の音楽へのアプローチが容易になった（戸ノ下達也編『音楽文化新聞 選時期文化史資料』全3刊、金沢文圃閣、2011年）。また、京都市立芸術大学のホームページには、同大学日本伝統音楽研究センターに所蔵されている『音楽文化新聞』の記事索引が提供されている。
- 9) 同誌は1992年に龍溪書舎より復刻版『シンジャワ』が刊行されている。本稿では、この復刻版を参照した。
- 10) 1942年12月8日、朝日新聞社によってジャワ島に設立された新聞社。現地語新聞『ア

シア・ラヤ *Asia Raya*」、邦字新聞『ジャワ新聞』なども刊行している。

- 11) 織田康孝「日本軍政下のジャワ島における宣伝工作—雑誌『ジャワ・バル *Djawa Baroe*』の表紙を中心に」(『日本近代学研究』第43輯、2014年)においては、表紙に使用された写真について考察している。
- 12) 「布告第12号 学校再開ノ件」(1942年4月29日)。
- 13) 内地においては、1941年の小学校令(いわゆる国民学校令)をもって、小学校は国民学校と改められた。
- 14) 「治政普第59号 国民学校学年度学級教授科目及時間割ニ関スル件通帳」より別表「各学年一週間授業時間表」(1942年7月22日)。
- 15) 爪哇軍政監部総務部調査室の「極秘 爪哇に於ける文教の概況」において、「オランダが二十世紀初頭、教育制度の確立に意識的に着手した当時、七年間に僅かに唱歌の教科書を一冊作り得たのみであると言はれてある如く、教科書編纂は種々の事情よりして困難なるものである。」(28頁)と報告されているように、オランダの統治下では唱歌の教科書が使用されていたものの、教科書の編纂は困難であった。なお、同史料は倉沢愛子によって、『南方軍政関係資料』として複製され、1991年に龍溪書舎より刊行されている。
- 16) 前掲「極秘 爪哇に於ける文教の概況」31頁。
- 17) 『ジャワ年鑑(昭和十九年)』ジャワ新聞社、1944年、167頁。
- 18) 同上。
- 19) 同上、168頁。『音楽文化新聞』第45号の記事では、「芸能文化指導所」と紹介され、組織は文学、美術、工芸、音楽、映画、演芸の6部と若干の相違がある(「芸能文化指導所を設立 宣撫班飯田氏等が指導協力」『音楽文化新聞』第45号、1943年4月10日、5面)。
- 20) 飯田信夫はクロンチョンがアメリカのジャズ音楽の影響が大きく、特にハワイ音楽と似ていることを指摘し、ガムラン音楽に立ち返ることを推奨している。飯田によれば、ガムラン音楽は日本の雰囲気似ているという。(飯田信夫「鸚鵡の衣裳 バタビヤにて」『音楽文化新聞』第23号、1942年8月20日、3面、なお同記事は『東京日日新聞』からの転載である。)
- 21) 前掲、倉沢愛子『日本占領下のジャワ農村の変容』、294頁。
- 22) なお、1944年9月15日刊行の第18号、同年12月1日刊行の第23号に、現インドネシア国歌である《インドネシア・ラヤ》が掲載されていた(後者は歌詞のみ)ものの、本稿では考察の対象外とする。
- 23) 『ジャワ・バル』第5号、1943年3月1日、27頁、織田による和訳。
- 24) 『ジャワ・バル』第13号、1943年7月1日、29頁。
- 25) 「共栄諸国の児童達に贈る “大東亜共栄唱歌集” 発表会 音盤・絵本も近く発売の予定」『音楽文化新聞』第44号、1943年4月1日、1面。

- 26) 「東亜共栄の大理想を謳ふ 大東亜共栄唱歌集編纂 耳と目からする南方音楽文化工作」『音楽文化新聞』第28号、1942年10月10日、1面。
- 27) 同上。
- 28) 酒井健太郎『『ウタノエホン 大東亜共栄唱歌集』(1943年)研究序説—研究の意義と方法—』昭和音楽大学『研究紀要』第59号2012年、同「日本音楽文化協会の対外事業—『ウタノエホン 大東亜共栄唱歌集』を中心に」戸ノ下達也・洋楽文化史研究会編『『戦う音楽界』—『音楽文化新聞』とその時代』(『音楽文化新聞』別巻)金沢文圃閣、2012年。
- 29) 酒井がタイの国立図書館、公文書館、複数の大学図書館、資料館等を調査したところ、『大東亜共栄唱歌集』に相当する唱歌集は発見されなかった(前掲、酒井健太郎「日本音楽文化協会の対外事業—『ウタノエホン 大東亜共栄唱歌集』を中心に」)。
- 30) 前掲、松岡昌和「日本軍政下のシンガポールにおける歌の教育と『日本イメージ』」。
- 31) 前掲、飯田信夫「鸚鵡の衣裳 バタビヤにて」。しかし、飯田は《トナリグミノウタ》を歌う子どもたちが「隣組」が何かを理解することなく、鸚鵡のように旋律に乗って発音していることを問題視している。
- 32) 1893年8月12日に文部省告示第3号として、祝日大祭日唱歌の歌詞および楽譜が制定され、《君が代》《勅語奉答》《一月一日》《元始祭》《神嘗祭》《天長節》《新嘗祭》の8曲をそれぞれの儀式日に歌うこととされた。
- 33) 『ジャワ・バル』第1号、1944年1月1日、34頁。
- 34) 「新民族歌謡を制定 ジャワで住民から作詞作曲を募集」『音楽文化新聞』第59号、1943年9月10日、7面。本文中では、曲名を示す《 》を使用せず、史料中で使用された「 」で表記した。
- 35) 同上。
- 36) 『ジャワ・バル』第21号、1943年11月1日、33頁。
- 37) 日本貿易進行機構アジア経済研究所 岸幸一コレクション Tsuda Fumio, attached civilian. (インドネシア軍政裁判記録)。本稿では原語の史料を確認した上で、史料の和訳は、前掲、倉沢愛子「日本軍政下のジャワにおける映画工作」を参考にした。
- 38) 『ジャワ・バル』第4号、1944年2月1日、33頁。当時、内地においては、懸賞による新歌曲の作成がさかんであった。「大東亜共栄唱歌」もその一例である。
- 39) 『ジャワ・バル』第6号、1944年3月1日、19頁。
- 40) 日夏栄太郎(本名:許泳)については、内海愛子・村井吉敬『シネアスト許泳の「昭和」—植民地下での映画づくりに奔走した朝鮮人の軌跡』(該風社、1987年)を参照されたい。